

そういうえばそうかもしれない。彼に逢いたいと思つても、これはどうせ恋人ごっこにすぎない。

帝人から連絡するのはばかられた。彼が都合が良いときに逢えればそれでよかった。それで満足するべきだと思つていた。

「何かあった？」

「さあ？」

臨也は昨日、帝人が見ていたことに気づいているのかもしれない。気づいていないのかもしれない。もはや、どちらでもよかった。

わずかに背伸びをして彼の唇を強請る。そんなことをするのは初めてだった。望み通り唇が与えられ、そつと開けば臨也の舌が口腔へと入り込んできた。

「ん、……っ」

やがて唇が離れたが、自分を支えきれなくて臨也にすりつく形になる。

「珍しいね。そういうのも嫌いじゃないけど」

笑う臨也はどこまでも蠱惑的だ。

「夜まで待てない？」

耳元で囁かれ、頷く。すると抱き上げられて、そのまま寝室へと連れて行かれた。歩けます、と言つたけれど、臨也は聞こえないふりをする。

もどかしい気分で帝人が制服のボタンをはずそうとすれば、彼が器用にするすると脱がしていく。こんな時、つくづくと実感する。彼はこういうことに慣れている。

それが切ないのか、悔しいのか帝人はよくわからない。けれどそんなことを思うのは、今日が最後だ。

何度もキスをして、唾液を交換して、そして彼の舌が、指が自分の全てにふれていく。最初は羞恥心でどうにかなりそうになるけれど、そのうちなにも考えられなくなる。促されて、彼の性器に唇と舌で奉仕することも覚えた。

苦手だけれど、彼の精液を飲み込むことも一応できる。その味に慣れることはなかったが、最後と思えばいつもより丁寧に性器に吸いつき、残滓すらも飲み込む気になった。

そうやって口で奉仕することで、臨也の息が乱れるのを実感するのは好きだった。いつも涼しい顔をしている彼が、情交の時に垣間見せる素顔。……もしかしたら、素顔に見せた演技かもしれないけれど。

「足、開いて」

言われるままに足を開き、受け入れるための場所を晒す。まだ入り口は狭く、最初は指を受け入れるのがやつとだ。けれどそれは少しずつ、けれど確実に雄を受け入れるためのそれになっていく。

「……っ、……ひぁ……っ」

指の本数が増やされ、意地の悪い指は帝人の弱い部分ばかりを攻撃してくる。どこが弱いのか、とうに臨也には全て知られていた。

「や、——そこ、ばっか、り……っ」

「嫌じゃない癖に」
くすり、と臨也は笑う。